フレーベルの遺産の今日的意義

——生誕二〇〇年記念式典に招かれて——

荘司雅子

さあ、わたしたちの子どもらに
生きようではないか！

〈Kommt, lasst uns unsern Kindern leben!〉この標語をかかげて幼児教育を実践し世界最初のキンダーガルテンを創立したフリードリヒ・フレーベルが誕生してから今年でちょうど二〇〇年になる。この生誕二〇〇年を記念して東ドイツでは国家的な行事として世界各国のフレーベル研究者や幼児教育関係者を招いて四月一九日から四日間盛大な記念式典や国際的な研究発表会が開催された。フレーベル生誕二〇〇年記念祭の委員会の委員長であるギュンター博士（Karl-Heinz Günther,（東ドイツ教育科学アカデミー副総裁）、ボルク博士（F. Bolck, シラー大学院長）、ミッツェンハイム博士（P. Mitzenheim, シラー大学教授）、その他東ドイツ国内フレーベル研究者はいずれも生誕二〇〇年記念祭を催す意義と、フレーベルの業績の今日への影響についてそれぞれの角度から強調した。それぞれの強調に共通した点は、フレーベルが教育史上に残した遺産のもつ今日的意義を高く評価していることである。各国代表の発表はそれぞれの国におけるフレーベル運動の過去と現状についてであった。私も日本におけるフレーベル運動について率直に話した。各国の代表の発表も同じくフレーベルの遺産のもつ今日的意

義を述べている。

教育史上に残されたフレーベルの遺産は、人間教育一般に関するものと幼児教育および母性教育に関するものである。人間教育一般に関するものは、フレーベルの世界観・人間観および教育観に流れているもので、しかもそれがフレーベルが生きていた時代においては人びとから受け入れられなかったものであったが、時代が現代に進むにつれてそれが認められ、そしておそらく将来に向ってますます正当化されるであろうところのものである。たとえば人間と自然は共に永遠の法則によって動かされ支配されている。人間と自然は共通点をもつと同時に切り離すことのできない密接な関係にある。そして人間はこの地上において自己のうちの神性を十分に発揮することが人間の最高の使命であるとフレーベルは強調している。この考え方は当時の人びと、とくに旧教徒の思想と相入れないものである。旧教徒は地上的な生活よりも天上的な生活を重視するから、地上における人間的な営みは軽視されることになる。

次に人間それ自身についてのフレーベルの見方である。人間である以上、誰しも等しく神の本性をもっているから、もともと善であり、もともと平等であって、決して人権・性別・出生地域・職業・宗派などによって差別されるものではない。地上における人間の生活は上下の差があってはならない。これも封建体制の強い当時は、上中下の身分階層のきびしいヨーロッパにおいてフレーベルのこの人間観は認められるはずはなかった。フレーベルはこのような世界観や人間観にたって郷里の近くのカイルハウに学園を開いて新しい教育を実践した。フレーベルの教育実践は、当時行われていた教育と違って、すべて人間の発達に即し、人間の要求に応ずる人間的な教育の方法と教育の内容で行った。どの子どもにもひとしく秘められている無限な神性をひとしく発揮させるように工夫した教育であった。

カイルハウの学園で実践した児童期の教育原理をフレーベルは、晩年になってからバート・ブランケンブルクにおいて乳幼児の教育に実践した。乳幼児は生まれながらに活動衝動・表現衝動・創造衝動をもっている。これらの衝動を健全に育むことこそ人間教育の初

まりであるとフレーベルは思った。そしてそれは乳幼児の遊びを育てること、教育的な遊具を乳幼児にあたえ、乳幼児自らそれで遊びながら自ら学び自ら成長するように導くことにあるとフレーベルは確信した。そのためにフレーベルは、教育史上未だ考えられていなかった教育的な作業遊具（恩物）を考案し製作しそれで幼児教育を実践する保育者を養成し、キンダーガルテンを創設した。作業遊具の他にフレーベルは、幼児期にふさわしい教育内容、すなわち歌や遊戯、描画や折り紙などを工夫したことはいうまでもない。幼児期の子どもは、母親が仕事をもっているかいないかに関係なく、どの幼児期も就学までにキンダーガルテンに行くべきであることを強調している。人間らしい教育は生まれた時から始めなければならないというのがフレーベルの主張である。そのために彼は本能的な母性を総明な母性に教育しなければならないと思い、母のための教育書として、あの『母の歌と愛撫の歌』を著わした。その内容は詩と歌と遊戯である。母親がわが子を誕生と同時に育てるための手引きの書物である。

この書の目的は、日常の母と子の自然の生活の中で母と子がいっしょに指遊び、手や腕の遊戯をしながら乳幼児を身の廻りの事物の世界や自然の世界へ導いたり、人びとの日常の営みを見せたりすることによって自然界や人間界を理解させ、同時に自然への愛、人間に対する愛や敬の心、感謝や思いやりの心、ゆずり合いや助け合いの心の芽生えを育てようとするところにある。

ややもすれば保育の技術のみに走り、幼児の内面的な心を育てることをおろそかにする今日の幼児教育に対して、フレーベルのこの保育の精神や原理や方法は、ますますとり入れられ見なおされなければならないと思う。

（聖和大学）

〔本稿は、昨年十月に御執筆いただいたものです。—編集部〕